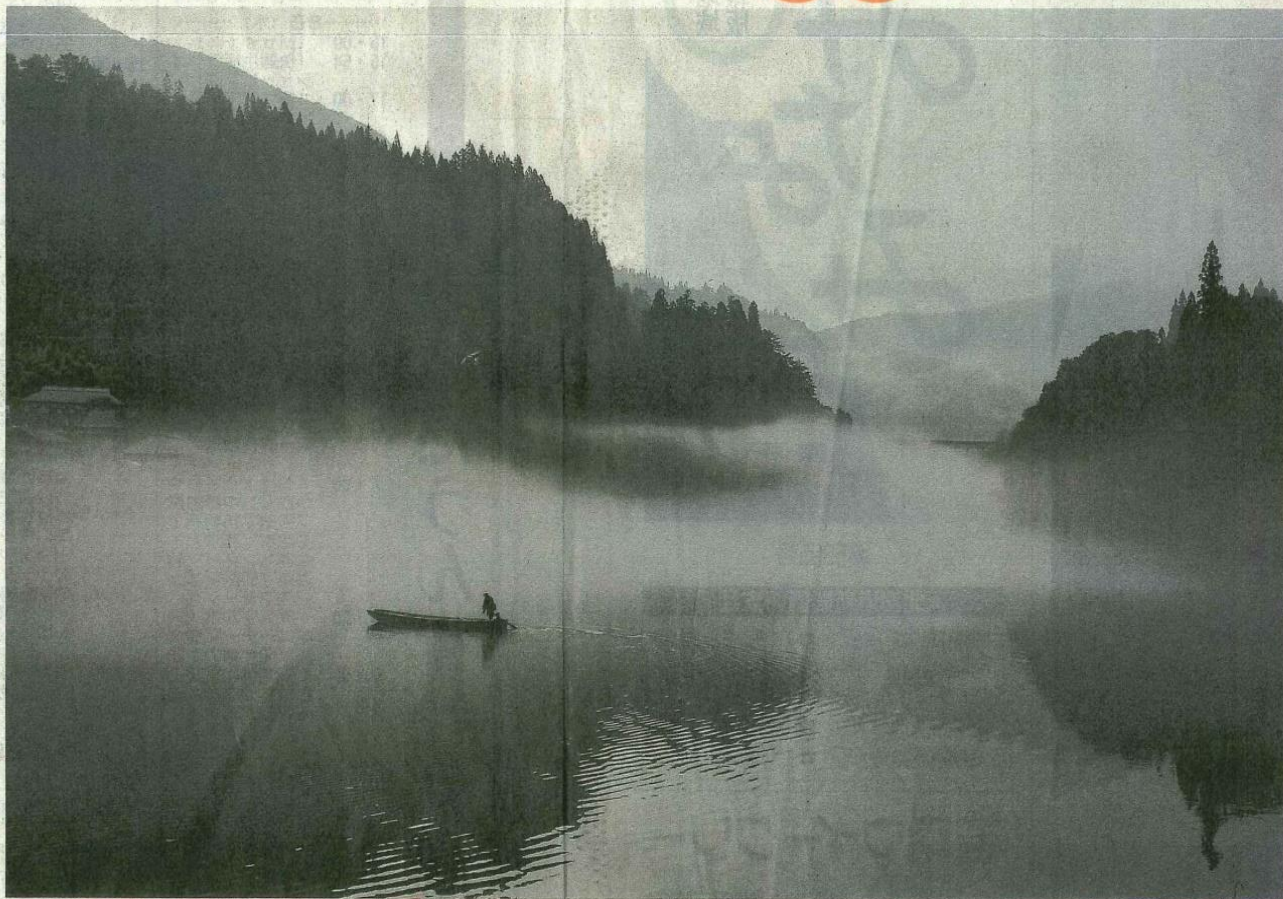


東北マチめぐり

魅せられる四季の変化



霧幻峡

漂う霧、渡し船 水墨画の趣

午前5時、只見川を白い霧が覆っていた。ゆっくりと漂いながら、1秒ごとに姿を変える。その中にほんやりと浮かび上がって見えてきたのは、舟だ。

三更集落周辺は現在、「霧幻峡」として知られる。300年もの間、集落の住民は只見川を挟んだ早戸地区への交通手段として舟を渡していた。住民自ら「船頭」となり、雨の日も、風の日も、もちろん大雪の日も。集落は1964年の裏山崩壊で廃村となり、6戸が800戸ほど下流の雨沼地区へ移転。以来、渡し舟の歴史も途絶えていた。この土地の原風景に光を当てたのが、三更集落住民の子孫で写真家の星賢孝さん(69)。船頭として観光客を霧の中へ案内する「霧幻峡の渡し」を昨年から本格的にスタートさせ、地域の活性化につなげている。

川霧が立つのは、夏の早朝や夕方が多い。船着き場から舟に乗り込んですぐ、星さんは「水を触ってみて」という。指先を浸すと、あまりの冷たさに驚いた。「只見川の源流は尾瀬で、雪解け水がいつまでも入ってくる。霧は空気と水の温度差が大きいほど出るわけ」。今年の夏は気温が高いこともあり、早朝は大抵霧を見ることができるといふ。

水墨画のような風景の中を、星さんのこぐ舟が進む。霧の中はひんやりしており、汗が引いていく。「日が入ると、さらに幻想的なんだ」という言葉通り、朝日に照らさ



舟をこぐ星さん。「霧は風で左右される。動きがあるほうが面白い」

れた霧は白く光る。空が明るくなるころには、溶けるように消え、まるで夢から覚めるようだった。途端、周囲の緑が濃く映った。営業期間は、4月下旬から11月中旬。日の出から日没ま

での事前予約制。舟の往復と散策ガイド(1時間)で基本料金5千円(4人まで)。5人以上は1人につき1200円の追加料金。問い合わせは星さん ☎080・11688・3959へ。

夕暮れ時は霧もピンクに染まる

三島町と金山町の町境にある「霧幻峡」。夏の早朝は、川霧が幻想的な風景を見せる